

不死鳥の メロディー

平尾昌晃

潮出版社

218317

不死鳥の メロディー

平尾昌晃



潮出版社

不死鳥のメロディー

初版印刷 一九七二年十一月十五日
初版発行 一九七二年十一月二十日

定 価 四八〇円

著 者 平尾昌晃

発 行 者 碓井昭雄

発 行 所 株式会社 潮出版社

東京都新宿区南元町十四ー一
電話 東京三五七・七二二（代）
振替 東京六一〇九〇

印 刷 奥村印刷株式会社
製 本 東京美術紙工株式会社

© Masaki Hirao Printed in Japan 1972

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

平尾昌晃（ひらお・まさあき）

昭和十二年、東京に生まれる。三十三年「星は何んでも知っている」でロカビリーブームの頂点に立ち、山下敬二郎、ミッキー・カーティスらと全盛時代を築いた。その後歌手から作曲家に転身。名前も昌章から昌晃と変える。四十二年「霧の摩周湖」「渚のセニョリーナ」でレコード大賞作曲賞を受賞。二年間の闘病生活の後「愛は不死鳥」で再出発、ヤング歌謡フェスティバルで最優秀賞受賞。その後、伊東ゆかり、布施明、じゅん&ネネ、五木ひろし、小柳ルミ子らのヒット曲を作曲、現在に至る。

不死鳥のメロディー

はじめに

早いものである。十年一日というが、ボクが音楽の世界に入って、早くも十五年の歳月が流れた。

前半は、他人の作った曲を、力いっぱい歌った。はじめは、ただ歌うことに夢中だったが、そのうち、歌の心を理解して、作者が何を表現したいのか、その心を訴えようと努力した。

人生とは不思議なものである。今度はボクが曲を作るようになったのだ。

自分のいいたいこと、欲びや怒りを、歌に託し、メロディーで表現して、少しでも多くの人々に、親しまれ喜んでもらえるような歌を、これからもドシドシと作っていききたいと思う。

さて、その作曲家のボクに、長い原稿を書け、という。歌は数行、一冊の本は原稿用紙で二百数十枚、こりゃ大変だな、と、すぐさまバンザイしてしまった。

だがしかし、ボクも三十四年間生き続けてきたのだから、その人生にはけわしい山もあり、歓びに輝ける海もあった。人生について、ボクなりに感じたこと、また、言いたいこともある。

この際、折角与えられたチャンスに、そうした自分のすべてをさらけ出してみよう。それがこ

の本を読んでくださる人に、何かの励みになるなら幸いだ、ということに気がついた。

人にはそれぞれの持つ運があり、しかも大変に不公平だと思われる天の配剤がある。だが、それはその人の生まれた時から持っているものだから、文句をいわずに精いっぱい現在を生きることだと思う。

たとえばボクは、中学生時代、ピンポンが大変に強かった。

多くの大会に優勝し、高校、大学と卓球部に入り、サラリーマンになっても、ピンポンを続けよう、と考えていた。

ところが、高校に入ってボクより強いＳクンと会い、自慢のハナをへし折られた。そして、ピンポンの道を断念したのだが、もしその時に、Ｓクンと対戦しなかったら、ピンポン日本で、中国選手団と対戦し名声を博していたかもしれない。

そうになったのが幸せだったか、現在の自分が幸せか――。

“もしもあの時、ああなっていたら……”

など、誰しもが思うことだ。しかし、その曲り角を通り抜けてきたのが現在の自分なのだから、文句はいえまい。

また、これから音楽の道を志す人たちに言いたいのは、やはり、努力の積み重ねが、素質を美しく開花させる因となる、ということだ。頑張ってください。

なーんて、真面目なことと言っても、根は三枚目のボクだから、これから書くものは、そんなし

かつめらしいことなんかじゃない。すぐに脱線も、転覆さえも辞さない。そんなボクの手綱を巧みにさばいて出版に導いてくださった潮出版社の鈴木征四郎出版局長、担当の砂田重幸氏、また全体の内容構成で叱咤激励してくださったルポ・ライターの山口浩氏、写真提供を快諾くださった婦人生活社、渡辺音楽出版に感謝の意を表したい。

昭和四十七年十一月三日

平尾 昌晃

不死鳥のメロデー

目次

はじめに

第一章 歌うことから曲づくりへ

北海道からの一枚の葉書 13

ロカビリーの貴公子たち 31

クラシック家族への反乱 47

歌を断たれて 63

嵐の前のレコード大賞作曲賞 71

病魔とのたたかい 75

「愛は不死鳥」で再出発 85

第二章 あの歌手この歌手そしてボク

「霧の摩周湖」の布施明 93

「恋のしずく」の伊東ゆかり 103

「愛するってこわい」のじゅん&ネネ 111

「よこはま・たそがれ」の五木ひろし 119

「わたしの城下町」の小柳ルミ子 129

あの歌手この歌手 139

第三章 ギターをペンにかえて

ジグザグ交遊録

147

友・ともだち・親友 153

これは困ったタレント志願者 163

レコーディング 169

ボクのめざすメロデー 179

歌は健康から 185

ボクのおしゃれ談義 193

ビバ！結婚！！ 199

第一章

歌うことから曲づくりへ

北海道からの一枚の葉書

その頃、ボクは一人ぼっちだった。来る日も来る日も、ギターを相手に、思いつくままの歌を口ずさみ、毎日を過ごしていた。

これがかつて、ロカビリー歌手として、世間の注目を浴び、ハイティーンの女の心から騒がれたスターだろうか、と他人が見たら思ったことだろう。

だが、世間の人たちはもうその頃すでに、ボクのことなんか、忘れ去ってしまっていたかもしれない。

昭和三十三年二月、第一回日劇ウエスタン・カーニバルで、華々しくデビューしたボクたちロカビリアンは、すさまじいほどのロカビリー旋風の人気の波に乗って、若いファンのハートをがっつちりと掴んでしまった。

特に、ボク、山下敬二郎、ミッキー・カーチスは、ロカビリーの元祖として「ロカビリー三人男」「ロカビリーの貴公子たち」と、もてはやされ、ステージはもちろんのこと、映画にも出演したりして、すっかりスター気どりだった。

だが、このロカビリー・ブームも、二、三年すると次第に衰えはじめた。

ボクはすばやくその兆をキャッチして、△星はなんでも知っている▽△ミヨちゃん▽などを歌い、歌謡曲へ転向をはかった。

これは成功し、何曲かのヒットをとばしたが後がつづかず、役者に転向したりしているうち、ハワイ公演へ行つた帰りに、なんの気なしに買って来たピストルが見つかつて、ピストル不法所持で逮捕されてしまったのである。

スターなんていわれて、ちやほやされていたころの気分が抜け切れず、なんでも思い通りになると考えていた未熟さ、ピストルをカッコいいから、なんて買って帰つた非常識さは、たちまちマスコミによって叩かれ、あつという間に、芸能界から、いや、社会からも抹消されてしまったのだ。

昭和四十年二月のことである。

末っ子で甘つたれでわがままで、人一倍淋しがり屋だったボクは、東京のアパートを引き払つて、茅ヶ崎の両親の許へ帰つた。

それからのボクには、社会との交流のない、たった一人ぼっちの毎日がはじまる。

スター歌手時代に、絶えずボクを取り巻いていたマネージャー、プレイヤー、付人、運転手たちも、いつのまにか去ってしまった。

ボクに残されたものはギターだけだった。